

Title	コンバウン王朝時代(その1) : アラウンパヤー王の出現
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 34 p.43-p.57
Issue Date	1975-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80557
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コンバウン王朝時代 (その一)

～アラウンパヤー王の出現～

服 部 正 一

“The Period of Konbaung Dynasty”

～ Alaungpaya founded his Dynasty ～

by Masaichi Hattori

နိဒါန်း

န မေတ္တဿကဝ ဝ တေအရဟ တေသမ္ပဘမ္ပဒဿ။

ဤစာစောင်၌ ရေးသားအပ်မည့်မှာကား အလောင်းဘုရားဘုရင်မင်းကြီး မြတ်အကြောင်း ပင်ဖြစ်ပေသည်။ မွန်လူမျိုးတို့ကိုဖြူဖျက်ပြီး လွင်မြန်မာနိုင်ငံတော်ကိုပြန်လည်ထူထောင်သောသူကား ရွှေဘိုမြို့ဦးအောင်ဇေယျဖြစ်၏။ နောင်အခါအလောင်းဘုရားဟုခေါ်ဝေါ်သမ္ပတိခြင်းခံရသူဖြစ်လေသည်။

အလောင်းဘုရားမင်းလက်ထက်၌ မွန်တလိုင်းတို့သည်အလွန်အင်အားကြီးမား၏။ ၎င်းတို့အပြင် ရွှေ့ရှမ်းနှင့်ကယားတို့ကလည်း ပုန်ကန်ထကြွသောကြောင့်အလောင်းဘုရားသည်၎င်းတို့ကိုအလွန်အမြန်ချီတက်တိုက်ခိုက်ရသည်။ အလောင်းဘုရားတန်ခိုးကြီးစေချိန်တွင်၊ ဒတ်ချီလူမျိုးများ၊ ပြင်သစ်လူမျိုးများနှင့်အင်္ဂလိပ်လူမျိုးတို့သည်ထင်ရှားကြ၏။ အလောင်းဘုရားနှင့်အင်္ဂလိပ်တို့ဆက်သွယ်မိတ်ဖွဲ့ကြ၏။ ပြင်သစ်တို့ကား မွန်တို့အားထိရောက်စွာအကူအညီပေးတော့၏။ သို့သော်၎င်းတို့နှစ်ဦးနှစ်ဘက်သည်လည်း အချင်းချင်းသက်သမင်းဖြစ်သောအရေးကိုမူပေပေါက်ခဲ့လေသည်။

အလောင်းဘုရားနှင့်နိုင်ငံခြားသားဆက်ဆံရေး၌မြန်မာတို့သည် အကျိုးအပြစ်နှစ်ရပ်စလုံးကိုခံစားရလေသည်။ ဤသို့သောအခြေအနေဖြစ်ပေလရာမှမြန်မာတို့သည်လူမျိုးအကျိုးကိုမုချသိမြင်ရလေသည်။

အလောင်းဘုရားမင်းသည်မြန်မာနိုင်ငံတပြည်လုံးကိုစည်းရုံးရသည့်အောင်မြင်ခဲ့၏။ သို့သော်နောက်ဆုံးတွင်၊ ယိုးဒယားတို့ကကားဝယ်အစွန်အနားဆီသို့ဝင်လာ၍တိုက်ဖျက်သောကြောင့်ယိုးဒယားကိုချီတက်တိုက်ခိုက်ရလေသည်။ သို့သော်လည်း ယိုးဒယားမြို့တော်ကိုတိုးဖောက်ခြင်းကားမတတ်နိုင်ပေ။ အတန်ကြာသော်စစ်သည်တော်များသည်ဖျားနာခြင်းရောဂါများကြောင့်သေကျေကုန်၏။ မကြာမီပင်အလောင်းဘုရားကိုယ်တိုင်ကတိုက်မကျန်းမ

မာဖြစ်နီ၊ တစ်တော်ဆုတ်ခဲလေရဘဲ ကင်း ရွာထွင်နတ်ရွာစံ တော်မူလေသည်။

မြန်မာနိုင်ငံတော်တွင်ကျော်ကြားသောမင်းတပါးကား၊ ပဏမအနော်ရထာ၊ ဒုတိယဘုရင်နောင်၊ တတိယအလောင်းဘုရားဖြစ်၏။ ၎င်းမင်းကြီးတို့သည်မြန်မာ့သမိုင်းတွင်အခြားမင်းများထက်ထင်ရှားကျော်ဇောသောကြောင့်မော်ကွန်းတင်ကဗျည်းတိုးသင့်ပေသတည်း။

မတကောင်တကောင်ဖွား ဟုဆိုသောစကားအတိုင်းအလောင်းဘုရား၏အရည်အချင်းများသည် ကုန်းဘောင်မင်းများအနက်အလောင်းဘုရားသည်အထင်ရှားဆုံးသောမင်းတပါးဖြစ်သည် ဟုသောအဆိုတစ်ခုရှေ့နေလိုက်နေသကဲ့သို့ဖြစ်နေ၏။ အလောင်းဘုရားသည်နဂိုလျက်တို့ထူးချွန်ထင်ရှားသောဂုဏ်အင်္ဂါတိုင်းတစွာနှင့်အတူလူတို့သောသဒ္ဓါဝါဒီမျိုးတို့မှလိုလည်း ဖွင့်ပြနေသည့်လက္ခဏာလည်းရှိသည်။

တိုင်းပြည်တပြည်သည်စီးပွားရေးအကျိုးခံချက်များလေလေစာပေသည်လည်းကောင်းကားလောလေဖြစ်သည်။ အလောင်းဘုရားလက်ထက်၌ထင်ရှားသောစာဆိုတော်ကြီးများပေ၍ပေါက်ခဲ့လေသည်။ အထူးသဖြင့်စကားပြေရေးသားစီကုံးဩဇာတို့များစွာပေ၍ပေါက်ခဲ့လေသည်။

အလောင်းဘုရားသည်စစ်အင်အားနှင့်တိုင်းပြည်တို့စည်းရုံးမှန်သော်လည်းဆောင်ရွက်မှုအဖုံဖုံဖြင့်ပြည်တွင်းသဘာဝရေးတိုးတက်ရေးကိုလည်းစနစ်တိမ်ခံ့လေသည်။ ဥပမာသဘာဝရေး၊ စာတတ်ပြုပြင်ရေး၊ စာပေပညာတိုးတက်ရေးစသောလုပ်ငန်းများကိုစွမ်းစွမ်းတမန်ဆောင်ရွက်ခဲ့ခြင်းသည်အလောင်းဘုရား၏စိတ်ဓါတ်သည်ကျေးမှုကိုဖော်ပြလျက်ရှိ၏။ ထို့ကြောင့်အလောင်းဘုရားသည်စစ်ရေးနာပတ်တယောက်ကဲ့သို့၎င်း၊ ပြုပြင်ရေးသမားတယောက်အနေနှင့်၎င်း အကြမ်းအနုပြည့်ဝသောမင်းတပါးဖြစ်ပေသည်။

ま え が き

本号では、主としてアラウンパヤー王について述べる。王の出現によってビルマ族によるビルマ国の統一が成され、パガン朝のアノーヤター王、タウンゲー朝のタビン・シュエティ王、に次いで、コンバウン朝の創設者アラウンパヤー王が第三度目のビルマ国を統一する。当時は、モン族の勢力が強く、グウエ・シャン族、カテー族(マニプール)の反乱があった。

また、西力東漸の黎明期にはポルトガル・スペイン・オランダ三国の角逐図絵が現出されていたが、これに次いで登場したのは英・仏両国であった。そして、彼らの勢力争いがビルマの舞台に現われるに及んで、ますますビルマ族がその民族的自覚を促がされ、遂にアラウンパヤーは全国を平定するに到る。しかし、王の好戦的計画は遂にはタイ国にまで進出せんとするに及んで、自らの墓穴を掘る結果となった。

アラウンパヤー王はもちろんビルマ英傑として大人物であると同時に、やはり人間的な弱点をも暴露しており、ビルマのナポレオンの性格の一面をうかがわせる。

一国の隆盛には文学の発達に伴うものであるというが、その例にもれず、次代に橋渡しとなる散文文学の勃興の萌芽が見られる。また、速からずして西洋文化の流入は近代ビルマ文化に影響することは必然である。

Konbaung 王朝 (1752～1885)

Alaung payā : (1752～60)

アラウンパヤーは1714年、3百軒の戸数よりなるシュエボ村（当時 Moksobomyo と呼ばれていた）に生れた。数世紀間、彼の家は代々町長を勤めていたが、後年彼はインワ王族の末裔であることを主張した。Dr. Kyaw Thet (p. 264) によれば、パガン朝ナラパティシートウ王より出で、インワ朝 Mō : hnyin : 王家の末裔となっている。

数年にわたる国内の無政府にも等しい状態のため彼は森林地方の長たちと共に村々に防砦を築いた。彼はシュエボ周辺数哩に及ぶ世襲の支配者であり、多数の民は彼の指揮を待ち望んでいた。前号に述べた如く、モン軍が分遣隊を派して住民たちに忠誠を誓わせようとしたが、アラウンパヤーはハリン南方のジャングルの中でモン軍を撃破した。モン軍は再び多勢を以って押寄せてきたが、彼らはアラウンパヤーの戦略によってくぼ地にて両側より攻撃され、惨々な目に遭い、僅か数名のみが生残り、インワに急を報じた。

その時、彼は38才、U Aungzeya（「勝利者」の意）と呼ばれ、モン族に対しビルマ族のすぐれた指導者として一躍有名になった。彼はインワ王朝滅亡以前にモン族に対する反抗運動のため彼の地域の住民を組織しはじめていた。彼がモン軍の分遣隊を撃ち破った時、46ヶ村もの結合力は彼の統一下にあった。そして、住民たちは武器と食糧を確保し、万全に整えて、絶対にモン族に屈服しないことを心に誓った。

モン軍は再度の敗北の侮辱に対して報復せんとして、モン軍の指揮官 Talaban は反抗運動の中心地であるシュエボを徹底的に撲滅するために今度は彼の最も精鋭な数千の兵員を以って三度来襲した。しかし、彼らには砲がなかったので、その攻撃はまた失敗し、包囲戦を企てねばならなかった。ある夜、アラウンパヤーは陣頭に立って総出撃し、モン軍を完全に撃破し、すべての敵の装備品を分捕した。ハーヴィの記述(p. 127)によれば、「ビルマ軍の追撃兵は Myin : byūshin Nat (白馬の騎神) が彼らの味方となって戦っているのが見えた。」という言葉が伝わった。モン兵たちは舟にとび乗り、途中舟を止めてインワに報告するいとまもなく、イラワヂ河を下り本国に逃げ返った。

これら三度にわたる勝利は彼を最早や単なる反抗軍の指揮者としてではなく王位に匹敵する者とした。反抗運動の中心部を形成した他の指導者たちも諸方より彼の旗下に集った。彼の行く処々にて相当の身分の者や血気の若者たちが忠節を誓った。それらの人々のうちから特に68名を選んで、それぞれの要職に就けた。彼はシュエボに伝統的なビルマ風の小宮殿を建て、その地を上ビルマの主要都市の一つとした。彼は今や Alaung payā : 王と号した。

アラウンパヤーがそれ程の勢力を得たのは国内の破壊が甚だしかったことが多いに助けとなった。ウ・ティンウも指摘する (p. 165) 如く、ヨーロッパにおいてナポレオンがフランス革命の動乱に乗じて彼の地位を高めたことと合せ考えることができるであろう。ビルマにおいても、前号にて述べたが、マニプール族、グエ・シャン族、モン・タライン族の鋒起や、それに乗じてタイ国軍が領土拡張の機会をねらう等の侵略行為が行われたが、もしそれらの事件が無ければ、ビルマ国内は平和であつたであろうが、彼らの動乱によってビルマ族の民族的自覚が呼び起され、その指揮者としてアラウンパヤーが彼の同族に団結を呼びかけたのであった。そのほか、ハンタワディ・パーミンの無能もアラウンパヤーの優秀性を一層明白にした、と考えられる。仮にハンタワディ・パーミンが偉徳すぐれた人物であつたなら、諸種族の侵略的反抗行動も起らなかったであろうし、アラウンパヤーが出現するにも及ばなかったであろう。

1753年の終り頃、彼はインワを攻撃し、モン軍よりそれを取戻すことができた。そして彼の息子 Maung Lauk (別名 Thado Minsaw) をインワの太守に任命した。彼はなおマダヤの *Ökpo-Shans* 族と結託するモン・タライン族を虐殺した。グエ・シャン族の長 Gunna Ein は最後には中国国境へ逃亡した。幾多の戦闘に敗れたモン軍は士気が挫け、夜中にインワを撤退して、イラワチ河を降った。1754年1月のことであった。

その頃でもアラウンパヤーは森林中よりは出ていなかった。ビルマ人が有名な所々のパゴダにて一連のお祭り騒ぎを催して勝利を祝っていた間に、局面を一変させるほど強力なモン軍がインワの前面に現われた。そして、都を強襲することはできなかったけれども、都周辺の数マイルに渡って大破壊をもたらした。やっとモン軍が追払われた時に、下ビルマのモン王国にてビルマ族にとってよくない事件が起った。それはモン軍によって捕われの身となっていた Mahā Dhammayāza Dipati を自由の身にせんとする計画がペグーにて発覚されたことであった。それに続いて大規模な処刑の犠牲者の中には不運な前王と彼の3人の王子が含まれていて、彼らは形式上は溺死したことになる。それは前号 (p. 30) にても述べた如く、王家の流血は禁じられていたからである。

それから、プロームのビルマ人が立ち上り、モン守備隊を放逐したが、ちょうどインワより河を降ってくる退却中のモン軍に出会い、彼らによって包囲された。しかし、アラウンパヤー一行はモン族たちの跡をつけ、激戦の後、彼らを追い出した。1755年2月のことであった。この勝利によって彼は中部ビルマ全域の住民の忠誠を確保した。そして、彼はモン軍に一時の猶予もあたえず、南の方向に追撃し、ヘンサダ地方のルンセにて彼らに決定的打撃を加えた。それを祝って彼はその地の名を Myan-aung (「すみやかなる勝利」の意) に変えた。今や彼の前進するところ全戦全勝が続いた。タウンゲー、ヘンサダ、ミヤウンミヤ、バセイン、タヤワディ、そしてアラカンのタンドウェー地方等から服従と忠節を示す証拠品が送られた。その電撃遠征もダゴン (現在のラングーン) にて雨期のはじまる直前に終った。そのダゴンからモン族を一掃して、Rangoon (ビルマ名 Yan-gon 「戦いの終り」の意) と改名した。そして、彼は勝利を祝してシュ

エダゴン・パゴダにて厳粛な感謝の意を表明した。

しかし乍ら、完全な成功は決して確保されていなかった。一度モン軍の手に落ちた拡大な領土をビルマ軍が永久に保持し得ることができる保証はなかった。モン族の首都ペグー及びラングーンより河を横ぎったところに位置するシリアムは、なおモン族によって堅固に持ち耐えられていた。

上述の如くアラウンパヤーの連戦連勝は確かに波に乗っていた観もあったが、彼自身もその実力ある勇気を示した。それについて、ヴ・ボチャー (p. 198～201) はモン軍の部隊に属していたキン・ウの出身で、^{レフヤー}Letyā ^{ピヤンチー}Pyanhkyi (通例 ^{ンガ}Nga ^{チツ}Hkyit ^{ニョー}Nyo) と呼ばれた強豪な一兵士とアラウンパヤーについて次のように述べている。

ンガチツニョーは武術百般に通じ、特に槍・馬術にかけては一对一の勝負でなく、幾百幾千の兵を相手にまわして戦っても、引けをとらない程の豪の者と云われていた。アラウンパヤー王は彼のことを聞いて、彼がモン軍に従っているのは適当ではない、何としてもビルマ軍の方へ入隊させたいと思い、書を送って、彼に次のように伝えた。

「ビルマ王が汝に伝える。キン・ウの出身者^{レフヤー}・^{ピヤンチー}・汝がモン・タライン族の隸下にあることは不適當である。汝は武術においては人並はるかに秀いでいる。ただ学問や偉徳に欠けていることは遺憾である。これよりビルマ人となって我軍に入れば、部将として取立てよう。」すると、ンガチツニョー（^{レフヤー}・^{ピヤンチー}）は、「これまでアラウンパヤー王の軍と戦いを交えてきた、今更ビルマ軍に入ってモン軍を捨てようとは思わない」と返答した。アラウンパヤーは多数の兵士を送り、幾度も彼を捕えさせようとしたが、ンガチツニョーははげしく抵抗したため、彼を捕えることができなかったばかりでなく、ンガチツニョーの属する一隊はアラウンパヤー王の部隊に近づき、ビルマ軍の家畜をさらって行った。ある時、アラウンパヤーの精鋭部隊の兵士たちに一騎打ちをせよと挑戦してきた。アラウンパヤーも彼の挑戦に応じ、^{ミン}Min : ^{チヨウ}Kyaw ^{ビニヤー}Binnyā : の号をもつ ^{ンガ}Nga ^{ミヤツ}Myat ^{トシ}Htwon : を出したところ、ンガチツニョーは彼如きを相手にしては、我が槍の血の汚れになろうと豪語した。そこで、^{ミン}Min : ^{アラ}Hla ^{ジュエ}Shwe ^{タウ}Taung の号を受けた ^{ンガ}Nga ^{トシ}Htwon : が現われたが、ンガチツニョーは再び彼の挑戦をも拒んだ。次に ^{イン}Yin : ^マmābo, ^{イン}Yin : ^マmakanbo の二人を出したが、相手にするには不足だ ^{キナツ}Thenat ^ウwon ^{ンガ}Nga ^{カウ}kaung 部将を出せと言った。テナウオンが出場してはじめて、ンガチツニョーは、「よし、今こそ男らしく勝負ができるだろう。」と言って、種々な馬術を見せた。その間、テナウオンは槍でねらいを定めていた。ンガチツニョーはそれを知って、彼の方へ槍を投げた。槍はテナウオンの馬の鞍に突きさした。すると、テナウオン側の兵士たちが銃を林立させてンガチツニョーの隙をねらっているのを見て、彼は、「汝らは勝負の約束を守らないのか。」と言い放ってその場を去った。また、ある時、アラウンパヤー軍の部隊と遭遇した際ンガチツニョー一人だけで馬に乗り、ビルマ軍の中へ突入して、ビルマ兵たちを槍にて突き殺した。ビルマ軍の兵士たちは従えあがってしまった。その後、アラウンパヤーのいる所へ馬を走らせたところ、王は刀を構えて、ンガチ

ッニヨーと雌雄を決しようとした。さすがンガチッニヨーも王には近づくことができずにその場を去った。このように幾度か同じような場面が繰返されたが、遂にビルマ軍が優勢となって、ンガチッニヨーは逃げ隠れしなけりばならなかった。最後にはモン族の王弟の指揮する部隊に入ったが、モン軍の部将タラバンが彼を処刑してしまった。

ビルマにおける英・仏争奪戦

この頃に至って、イギリスとフランスが西力東漸の一環としてビルマに登場しはじめた。シリアムにおいてはフランスはすでにモン族の王を承認していたが、イギリスはアラウンパーの承認に傾いていた。

シリアムではモン族は、フランス勢力拡張のために野心的な計画をもって *Dupleix^{デュプレックス} の代理として数年前よりリボンディシェリからビルマに来ていた Sieur de Bruno という頭脳明晰なフランス人によって援けられていた。

1727年に戻るが、Dupleix は印度洋を舞台にフランスが活躍した主題の“Mémoire”を書いた。その中で彼はビルマのチーク材と原油の供給に注意を促し、また造船のためにビルマの海港の使用をすすめた。2年後、彼の努力の結果として、フランスの造船所がシリアムに建設され、ボンディシェリ向けに役立つ数隻の船舶を建造した。しかし乍ら、1742年モン族の反乱のためそれを放棄せねばならなかった。それより6年後、即ちヨーロッパではオーストリー王位継承戦役が終った年に当るが、Dupleix は再び自由にビルマに注意を向けることができた。そこで、彼は競争相手であるイギリスを制圧するために新しい有利な地点を物色していた時に、モン軍の使者がビルマ軍に対抗するためフランスの援助を求めてボンディシェリにやって来た。Dupleix は兵力と弾薬を約束した、そして予備段階として、事情を調査するために Sieur de Bruno を送ったのであった。Bruno は1751年7月ベグに到着した。その後間もなく、彼は数百名の精鋭なフランス軍をもってすれば、イラワヂのデルタ地帯を支配することは容易であろう、と報告した。そこで、Dupleix はその計画を企てるに必要な軍隊を緊急に送るよう本国に手紙を書いた。

一方、イギリス側ではマドラスの Saunders 総督は Dupleix の計画を妨げんものと常に注意を怠らず、ビルマに介入しようとするフランスの計画の噂に耳を傾けた。彼の情報はネグレイズ島を占拠できるかも知れない可能性を指摘して、直ちに行政委員に書を送り、東インド会社はその地を奪取することによってフランスの機先を制すべきことを促した。彼は Bruno の使節団がベグーに向ったことを知るや否や、ロンドンよりの返答を待たずに、その島を調査するために Thomas Taylor 船長を団長とする小規模の遠征隊を派遣した。彼はまたシリアムの個人商人 Robert Westgarth を駐在官に任命して、その領土割譲のためにモン族との交渉を委任した。

*Dupleix, Joseph François, Marquis, フランスのインド総督 (1742～54)

Taylor は地方の役人たちが非常に敵意をもっていることを知ったので、簡単にその調査を済ませた後、Westgarth の懇請を支持するためにペグーへ行った。モン族の政府はネグレイズ島におけるいかなる種類の移住にも断固として反対した。モン族に対する Bruno の勢力は絶大なものであり、モン王子と強固な同盟を結んでいた。その王子は政府の有力な人物であると見なされていた。それ故、イギリス側は動きがとれなかった。

この知らせは1753年3月に Thomas Saunders に達した。一方、Taylor はネグレイズ島に関して不愉快な報告をしてきた。それは交易所としては役に立たず、またその土地は不健康であるという。この報告を受取った時、行政官たちはその島を占拠せんとする計画を熱心に支持していることを聞いて、Saunders はやや当惑した。しかし、Bruno がペグーにて大いに好意を受けていることを聞くや、彼は躊躇することなく、強力な遠征隊を送り、1753年4月26日その島を占領した。

最初からその新しい植民地はイギリスにとって大きな負担であった。病気のために多数の死者を出し、モン族はボイコットを成功させたので、すべての食物や労働の供給はマドラスよりもたらされねばならなかった。しかし、Bruno がペグーの宮廷に留まる間は、イギリス軍の撤退は考えられなかった。しかし乍ら、1753年の終り頃には、イギリス側の見通しも少しは希望がもてはじめた。それはアラウンパヤーの興起とモン軍がインワを放棄したことで売買約定の機会が与えられたことであった。Dupleix が正しい勝負をしているかどうか決定しかねた。イギリスは数隻の船に積載した武器と弾薬をアラウンパヤーに急送するところまでこぎつけた。そして、モン族はフランスとの同盟を疑うようになり、イギリスに軍事援助の代償としてネグレイズ島の割譲を約束する使者をマドラスに送った。

しかし、この策略はモン族にとっては何の効果も生じなかった。Thomas Saunders はモン族に条約を提出し、以前の異議が再び出され、彼のアラウンパヤーに対する態度のためにモン族には Dupleix の株が一層高くなった、ことがやがて明白になった。1754年後半に Thomas Taylor はイギリスの政策がアラウンパヤーとの親密関係を求める方向に向けられるべきであるという勧告をもってマドラスに帰ってきた。それ故、ビルマ軍の戦士がイラワヂ河を下る遠征中に、1755年3月のことであったが、ネグレイズ島に使者数名を送った時、彼らは心から迎えられ、東インド会社の代理者 Henry Brooke はビルマ側に好意を示して軍事調停を促す書をマドラスに送った。

それまでにマドラスの総督として Thomas Saunders の後任となっていた George Pigot はインドの地平線上に忽然として現われてきたフランス軍との新しい競争に直面して、彼はビルマにおけるそれ以上の途方もない目的追及のためにも軍隊の出動を惜んではならないと決心した。ネグレイズ島の任地は重大な経済的負担となり、ビルマとの貿易の見通しは極度に遠のいて見えた。

一方、アラウンパヤーはダゴンに到達し、ネグレイズ島に緊急伝達を送って銃と弾薬を求めた。それと同時に Bruno とモン王子からは緊急な援助の要求がボンディシュェリに達しようとしてい

な分遣隊がシャン諸州に送られたが、彼らのほとんどの州よりはアラウンパヤー王に対して服従の証拠品が送り届けられた。アラウンパヤーはまた雲南の太守によって正式な承認を受けた。それから、シャン族及びチン族より成る大量の兵員を召集して、王はシリウムに対し軍事行動を指揮するためにラングーンに戻ってきた。

アラウンパヤー王のデルタ進出は陸上におけるのみならず、水上にても激戦を展開した。両軍共数百の大型軍船をもって恐るべき威力で激突した。陸上戦においてはアラウンパヤーはそれまでに城壁をめぐらした都の攻撃を経験したことがなかったので、彼の決戦はこれからであった。彼は1756年大軍を以ってシリウムを攻撃した。しかし、砲兵隊を備えていないアラウンパヤーの軍にとってはシリウムは恐るべき堅固な場所であった。城壁から煮え沸った瀝青^{れきせい}が注ぎ落され、またその頂上よりは大きな梁が吊り下げられていて、強襲軍がその真下に来るや否やその綱が断ち切られた。また、たとえ梯子を立てかけても、真先に城壁に手をかけた兵士は手を切り落され、梯子は倒し返された。

しかし、結局6ヶ月間包囲が続いた後、モン軍が兵糧攻めのため飢えに弱ったのを見定め、アラウンパヤーは義勇兵93名を選び、その中には親衛兵、部将、王子たちが含まれていて「黄金部隊」(Shwe-hlan-daw-tat-thā : dō.)として知られていた。彼らは王によって厚遇された。1756年7月のある夜、彼らは奇襲によって城壁を乗り越え、警固の兵を斬って城門を開き、味方の軍を引き入れた。この城門は Wet-that-tagā : (「猪を殺した門」の意) といって、その昔、Nga Than Hlyin が伝説の猪を殺した場所であった、という。Syriam がビルマ地名にて Than Hlyin [発音 tanyin] と呼ばれる所以である。ビルマ軍は “Shwebo-thā :” (シュエボの住人だ) という喚声をあげて、城内に殺到し、遂にシリウムを奪取し、町は完全に破壊された。次の記述は英人史家 Hall (p. 83) によるのであるが、

アラウンパヤーは彼的手中に落ちた Bruno 及びフランス軍に対し恐ろしい復讐を晴らした。Bruno はゆっくり焼き殺された。ポンディシェリからの増援隊と供給品を積載してラングーン河口に到着した二隻のフランス船は一通の手紙によっておびき出されたものであって、アラウンパヤーによって捕獲された。その手紙はアラウンパヤーが Bruno に彼が処刑される前に無理に船長宛に書かせたものであった。フランス将校はすべて虐殺され、その他の乗組員はビルマの軍隊に強募された。

次いで、1756～7年の間にヨーロッパ製の砲とフランスの砲手によって増強され、アラウンパヤーは水陸よりペグーへ進軍し、激戦の末、遂にペグーの包囲陣を完成した。

モン軍は僧侶を遣わしてアラウンパヤーに条件を求めしめ、モン王ビンニヤ・ダラはビルマ王アラウンパヤーに臣従を申し入れた。アラウンパヤーは二束の蘭花を使者に与えて、一束は供花に、一束は装飾にするように云った。モン族側はほっと一安心した。彼らはその一束をシュエモード・パゴダに献げ、他の一束をモン王女の髪に結んで、アラウンパヤー王の花嫁として差し出さんとした。しかし、王女にはモン軍の部将タラバンが彼女の意中の人であった。タラバンは

激怒し、堂々出撃して男らしく戦死せんことを決意して、モン軍に拒絶されるのを振り切って、彼の一族と精鋭の部下を引いてビルマ軍陣地を突破し、タトン地方のシッタウンに落ちのびた。しかし、モン王は彼の娘を侍女や公達を伴なわせて、アラウンパヤーの陣地に送り、アラウンパヤーに恭順の意を表した後、彼女はビルマ王の後宮に導かれた。また、モン軍の将兵はアラウンパヤー王に帰順した。

それより少し前に、アラウンパヤーは先にイギリスに約束した協議を果すために、彼は1756年の初め頃、英軍の John Dyer (少尉) と Dr. William Anderson に会い、彼らはネグレイズ島より George Baker 船長によってはじめられた協定を続けた。

ところが、二つの困難な問題があった。先づその一つは、条約というものは君主制についてのビルマ人の概念とは一致しないものであって、いかなる王も彼の後継者、または彼自身をも条約のために束縛することはできなかった。もう一つは、国王は国王とのみ取引に応じた。即ち、単なる貿易会社と協定を締結することは不可能であった。アラウンパヤーは彼の国において東インド会社の植民に正式な承認を進んで与える積りであったが、唯王の命によってのみその認可はイギリス王に当てられるものであった。イギリスの使者はルビーにて飾られた金ばくに書かれた手紙を託され、それをイギリス王に渡すように言われた。

ところが運悪く、その書類が到着する以前に、東インド会社はすでにネグレイズ島の植民を放棄するようにマドラスへ命令書を送ってしまっていた。そして、更に悪いことには、英国王を代表した適当な返答がなされなかったため、アラウンパヤー王は巧妙に欺かれたか、または気まぐれに侮辱されたものという結論に達した。

アラウンパヤーはなお反乱が続いて起るであろうと判断したに違いない。彼はネグレイズ島の英軍に幾度も弾薬を要求した。そして、もし返答が不適當であるならば、その植民地もシリアムと同様に扱うであろう、と威嚇した。英軍は今や非常に苦しい立場に置かれた。一方、ヨーロッパでは7年戦争が勃発して、彼らはフランスに対する作戦で手一杯であった。また一方では、ビルマにおけるフランスの勢力を除去することで、ネグレイズ島の植民はも早や何らの役にも立たなかった。George Pigot はロンドンにその放棄を認めるように忠告の報告書を送った、そして彼らは直ちにビルマより撤退するよう命令が発せられたが、それまでにアラウンパヤーは1757年5月にペゲーを全滅させていた。

ネグレイズ島におけるイギリス軍の長である Thomas Newton (大尉) は自分自身がアラウンパヤーに会見に行くことは賢明でないと考え、Thomas Lester (少尉) に代理として行かせ、最上の贈物を持参させた。Lester はビルマ艦隊へ案内され、アラウンパヤーはペゲーの捕虜と莫大な分捕品を携えて堂々と河を上流へと進んだ。Lester は王室用の船に乗ったアラウンパヤーによって二度の会見を許された。その時の様子が Hall. (p. 84) の記事によれば、Lester は剣をはずし、靴をぬいで、王の面前に入り、(パガン時代にナラティハパテ王の面前で中国よりの使者が靴をぬがなかったという理由で即刻処断された事件が想い起される。学報18号, 70頁) ひざ

まづいた姿勢のままで待機していなければならなかった。しかし、アラウンパヤー王はその時上機嫌で、不愉快な思いをしているイギリスの使者がそうと低い台を自分の側へ引きよせて、しびれた手足を楽にしようとした時に、その窮屈そうな様子を見て、アラウンパヤーは大声で笑った。そして、彼に英国風に座るように云った。やがて王の指示に従って、Lester は条約を求めた。これに対して王は彼が英国王に送った黄金板に銘記された命令書が十分なる保証契約であると応答した。尚それ以上の議論の後、もし Lester が条約を主張するならば、命令書をもってくることが望ましい、と王は卒直に云った。

その協議の間に、王はその困惑したイギリス人に盛んに種々な不適当な質問をした。例えば、イギリス人は何故ビルマ人のように身体に入墨をしないのかと尋ねて、*王は自身の入墨をした股を誇らしげに示した。

またイギリス軍はフランス軍を怖れているのではないかと尋ねた。そして、Lester がイギリス人として生れた者でフランス人を恐れる者は一人もない、と誇りを以て言った時、アラウンパヤーも世界中で自分が恐れる者は一人もないと断言することによって Lester の言葉に挑戦した。また、たとえ世界の列強国がビルマを侵そうとも、彼らを追い出すだけの能力があるとまで豪語した。すぐれたビルマ国王のうちにも、時にはこのようにうぬぼれの強い王がいた。パガン時代に例を取れば、パガン朝45代目のアラウンシートウ王（学報 16号、72頁）はかつて、「朕は経験、学識、偉徳等の点においていかなる先王よりも秀れている。」と豪語し、心驕ったために失明した、と云われている。このようなビルマ人の欠点は王に限らず一般人のうちにも見出されることがある。

かくして、彼ら二人はそれぞれ帰途についた。王はシュエボへ、そして Lester はネグレイズ島へ帰って行った。しかし、この協議によって、イギリスはアラウンパヤー王によって自由貿易の権利とネグレイズ島に要塞防衛権を承認され、なおバセイン工場に一区劃の土地を与えられた。一方、イギリスはその返礼として王に毎年12斤砲と2百 viss の火薬を提供すること、及び陸海のすべての敵に対してビルマ王に援助することを約束した。

しかし乍ら、その後間もなく、Lally の指揮するフランス軍ははげしくマドラスを威嚇しはじめたので St. George 砦はビルマとの関係をベンガルの William 砦に委かさねばならなかった。そして、1759年4月に Thomas Newton 大尉とネグレイズ島の守備隊の撤退が取り決められた。その時、多量の材木や貯蔵品は持ち運ばれなかったので、少数の番兵が監視にそこへ残されたのである。

この措置が講ぜられる以前に、アラウンパヤー王はマニプールに再び大侵略を行なった。その

*Dū: -baw-paung-baw (「ひざと股を暴わして」の意) と云って、ビルマの王朝時代には、僧侶の面前にいる時、パゴダを礼拝する時、及び仏像に祈りを捧げる時を除いては、高官の前にも僅かにひざや股を暴わして hmin-jaung-paw-yon-lauk (「入墨が見えるように」) 坐することは礼を失する振舞いとは考えられていなかった。(Judson's Bur-Eng Dict., p. 547)

間、アラウンパヤーの不在はモン族蜂起の合図となった。その蜂起はアラウンパヤーにとっては非常に不利となったので、彼はマニプールを去って南へ急進せねばならなかった。彼がラングーンに到着した時、ペグーの太守によってすでに秩序は回復されていたが、東インド会社の積年の敵であったアルメニア人たちにとってささやかれたことであるが、ネグレイズ島の指揮者がモン族の反乱者たちに武器を与えて援助していたとのことであった。ビルマ軍の各部隊約2千の兵は秘かに近くのジャングルに集合し、その植民地を急襲して、そのイギリス人、インド人を含めて100人余りを虐殺した。その虐殺を逃れた二人のイギリス人はその後捕えられ、アラウンパヤー王の前に引き出された。王は彼ら二人に、イギリス王に送った手紙に対する返事を受取らなかったという理由によってその植民地を完全に破壊する命令を出したことを告げた。

再度アラウンパヤー王の引いる遠征隊はビルマ史上最悪の破壊をマニプールに加えた。マニプール人はその残忍言語に絶せりと伝えているが、アラウンパヤーに言わせしめるとすれば、それはマニプール軍が以前にビルマ人に加えたことを繰返したにすぎない、と答えたであろう。王は Tamu^{ナム} 及び Thaugndui^{タウグンドゥイ} に防塞を築き、守備隊をそこに配置し、1819年までマニプール侵略は続いた。その結果、彼らの社会的・政治的状态が当時どのようなものであったかを今日語ることできない程にまでマニプール文明を撲滅してしまった。イムパールは占領され、幾千の人々は追放されて、サガインやアマラプラの地方に住居を求めた。彼らの中には船頭、絹織職人、銀細工師等が含まれていた。ビルマ人はこれら特殊技能をもったマニプール人を珍重したことが各史家の記述よりもうかがわれる。彼らは銀細工師としてビルマ宮廷に仕え、また絹織職人は A-hky-eit^{ア・フキ・エイ} 縞模様 (zigzag patterned puhso) を紹介した。そしてまた、この時より、ビルマ宮廷における占星術師の大半はマニプール系のバラモンとなり、また、Kathè Myin: (= Cassay Horse,) or the Kathè Cavalry として知られたマニプール兵より成る優秀な騎兵聯隊がビルマ軍の中に編成された。

タイ緬戦役とアラウンパヤー王の最後

アラウンパヤーがデルタ地帯を征服せんとして戦っていた間に、多くの村々は潰え去って、その住民はあるいは戦場の露と消え、あるいは恐怖のため移住し去った。幾千のモン族はタイ国へ遁走したのでデルタ地帯は再びひどい人口減少に見舞われた。そこで、王はタイ国に侵入してその国より多数の捕虜を得ることによって、それら住民不在の地域に扶殖せんと決意した。このことだけでも平和な生活に落着くことのできないアラウンパヤーにとっては適当な開戦の理由となったのであろう。折しも、1759年、タイ国軍がタヴォイに侵入したことが直接原因となり、アラウンパヤーは軍を進めた。かくて、タイ国との新たな一連の戦闘への序幕となり、タイ緬国境は長期にわたる侵略と反撃の場面となった。

その侵略は1759年の後半より1760年初期にかけて始められた。先づ、その手初めとして、チェンマイ州を屈従させることを計画した。ビルマ軍はマルタバン及びタヴォイを経て、テナセリム

を占領した。それ以来テナセリムはビルマ領となった。そして東に転じてシャン高原を越え、更にシヤム湾沿いに北方のアユタヤーに向った。南よりの攻撃はタイ国軍を完全に奇襲した。

アラウンパヤーによって開始されたタイ緬戦闘については史家によってその記述が少し異っている点が見られるが、総合して述べれば、1760年4月までアラウンパヤーは都を包囲し、その包囲戦は完全に進められていた。しかし、アユタヤーの城門は鎖されたままであった。そして、数千のタイ国兵によって固められた胸壁から大砲の火蓋が切られた。ビルマ軍も重砲を持ち出し、王自身が砲兵中隊の指揮をとった。アラウンパヤーはそれまで戦捷に慣れていたので、包囲戦に対する準備が十分でなかったらしい。連戦連勝のアラウンパヤー軍もこの度は勝利を得られるようには見えなかった。5月のある日、王が大砲の装填を見守っていた時、それが爆発し、王は重傷を負ったため、その包囲作戦は中止となった。その後、1週間を経ずして、全軍は急ぎ退却をはじめ、傷ついたアラウンパヤー王を帰途につけた。その際、王は彼の幼な友達であった Min hkaung-Naw yahta に後衛軍の指揮を委せた。彼は力の及ぶ限り、王を守り、敵を防いでよく戦ったけれども、遂にはタイ国軍に撃退され、落伍者を収容しつつ退却した。

王の一行がサルウィーン河に達する直前、タトン地方のキンユアにて、王はその負傷のために斃れた。1760年5月の初め頃であった。王の死体は彼の故地シュエボに届けられて、そこに国民哀悼の裡に埋葬された。彼は僅か8年間王としてビルマ国を支配し、彼の崩御の時には未だ46才に達していなかった。

アラウンパヤーが創設した王朝がコンバウン王朝と名づけられた由縁はアラウンパヤーの故地 Moksobomyo (「狩人の町」の意)を堅固な要塞にて囲らし、Yatana-Theingi-Kon:baung (「黄金の砦」の意)と名付け、その Konbaung の名をとって王朝の呼称にしたことによる。(U Tin U, p. 182).

アラウンパヤー王の業績

王は全国を平定した後、国民の繁栄を図るため、先ず着手した事業は彼の故郷であるシュエボの町の人々に十分な水を供給するためにナンダー湖を掘りおこした。また農業を盛んにするためにムー河にダムを設けたり、その他、各地にそれまであった古い水門や水道を修理するなど農業の発展に力を尽した。

また、王は改革者の一人として宗教の面にも尽した。戦争のために破壊されて廃墟化されていたパゴダを修復したり、シュエボの町に Shwe-zedi, Shwe-hkyet-tho-zedi, Shwe-gū-gyi:-zedi 等のパゴダを建立した。また、僧侶の集団についてよく検討し、*Dugot-tin-gaing:(外衣僧団)と*Thingan: yon-gaing:(僧衣僧団)が分裂しているのを Dugot-tin-gaing:僧団の一団に結合

*Dugot とは僧侶が肩に掛ける外衣を意味し、Thingan は外衣を含んだ、thing:baing (僧衣の下の部分) 及び Kowot (僧衣の上の部分) より成る僧衣全体を意味する。

させるよう説得した。そしてまた、ラングーンの Shwe-Dagon パゴダに黄金を寄進して金箔を施し、パゴダの階段や宿坊等を造営した。

また、国民間に風紀肅清を行うために飲酒を厳禁し、市町村において国民の財宝や品物が紛失すれば、統治者がそれに対して責任をもって償わなければならない。例えば、隣接せる二つの町又は村の間に紛失、又は強奪事件が起れば、それに近い村長や町長がその責を負うのである。そしてまた、当時なお盛んであったナツ神への捧げ物として牛やその他の動物の殺生、農業を司るナツ神をなだめるために農作物の収穫期に鶏を殺したり、村の守護神の礼拝、ナツへの犠牲のための一切の生けるものの殺生等の風習を禁じた。

(タウングー王朝のバインナウン王もこれと同じような改革を行ったことがあった。学報28号81頁)。

アラウンパヤー王の時代には文学がかなり盛んであった。Yan Aung Bala や Seinda Kyaw-thū (本名 U-O) はアラウンパヤー時代の著名な詩人である。1750年にミンプー地方の Sonhtā : 僧正はシンビュー・チュン・チャウン (寺院) にて修業しつつ Manū Yin : Dhamma-that (法典) を編纂したが、*Kaingsa Manu の諸判決を古聖マヌに帰する風習は同法典を以てその濫觴とした。その他、王の命によって彼の部将であった Mahā Thiri Uttama Zeya は Manu Kye Dhamma-that (法典) を編纂した。同書は当時行われていた法律及び慣習を集成したものであるが、その百科辞典的性質と、また僅かなパーリ語を混えたのみの平易なビルマ語で書かれているために一般に用いられるようになった。

また、アラウンパヤーの宮廷の詩人たちの中にも数名の大臣・武将がいた。その中でも有名な人は ^{レッ}Let-^{ウェー}wè-^{トン}thōn ^{ダラ}dara であって、ペグーの包囲戦に参加し、もとインワ朝最後の王の下に Hlu-ttaw 会議の書記であったが、アラウンパヤー王に帰順した部将の一人である。彼がペグー攻略に参加した際、ペグー城門にモン族たちに対する一種の脅迫文 (sāzwè) を ^{レッ}ウェー^{トン}ダラ が4行のパーリ文にて示したことはよく知られている。そのパーリ文は、

*"Haṃ rati yo sabba dhanāṃ,
Sā dhusammā dhammo natti,
Wa ne bhawatīti suṇāṃ,
Tī kappa gatā coro matā."*

であって、全体の意味は、

「我、モン・タライン族たちに、言う。汝らはすべての人々の財宝を盗み去り、善人が守るべきよき法を無視せしが故に、ハンタワディー国はジャングルに墮する如く、三災厄の時期に達し、盗賊の跳梁によって滅亡するであろう。」

このパーリ文の各行の頭字が *Haṃ sā wa tī* (即ち、ビルマ語の発音では Hanthāwadi) の地名

*Kaingsa Manu については学報32号、27頁。

と一致するのである。Hanthāwadi については学報22号19頁～20頁参照。

このようにアラウンパヤー王の時代に文学が発達してきたが、それは次の時代に入ってビルマ文学の隆盛を極める素地ともなっていたように感じられる。

アラウンパヤーの生涯は戦闘に始まり、戦闘に終わったかの如く評せられることもあるが、上述のように、文化面に力を尽したことも事実であり、部将としてりっぱであった一面、文化の面においても改革者としてその業績は認められるべきであろう。

ウ・ティンウはアラウンパヤー王の偉徳を次の如く喩えている (p. 195)

コンバウン朝の王たちの中で、アラウンパヤーは一軒の家を建てるのに土台から最後の仕上げまで完成するところの建築家のような人である。ところが他の王たちはアラウンパヤーが建築した家に装飾を施こしたり、その家が朽ち壊れるのを防いでいる人々のようなものである。また、もう一つの例をあげれば、アラウンパヤーが書いた ‘ṇ’ (na-nge) の文字を他の王たちがその終りの末尾の ‘ṇ’ を付け加えたのに似ている。故にアラウンパヤーはコンバウン朝歴代の王のうちで最も傑れた王である、と述べている。

彼の偉大な功績を考察すれば、ビルマ族によるビルマ国家建設事業において、第一にアノータ、第二にバインナウン (タビンシュエティとする人もある)、第三にアラウンパヤーとすべきであると考えられることは当然であろう。

参 考 文 献

Dr. Kyaw Thet: Pyi-danug-su Myanmā Naingngan Thamaing: (1962)

U Tin U: Myanmā Naingngandaw Thamaing: Sanpya (1957)

U Hpō: Kyā: Myanmā Yāzawin Akyin: (1837)

U On Maung: Myanmā Yāzawin-thit (1953)

D. G. E. Hall: Burma (1950)

G. E. Harvey: Outline of Burmese History (1947)

ハーヴィ著 五十嵐智昭訳: ビルマ史 (1943)

Mya Ke Tu: Sāpe-Tazaung

U Hpe Maung Tin: Myanmā Sāpe Thamaing: (1955)

U On: Shwe: That-pon Abhidān (1956)

U Tin Swe: Porāna Kahtā Ablidān (1954)

Judson: Bur-Eng Dict. (1953)

U Maung Gyī:: Pāli Abhidān Hkyut.

水野弘元著: パーリ語辞典.